

1 研究の背景と目的

英語の読解指導で、構文や文法に関する説明を加えながら日本語に訳すことによって内容を理解する方法がとられることがある。しかし、この方法では、英文を日本文に訳すこと自体が目的となりがちで、読み取った内容について考えたり、自分の意見をまとめたり、発表したりする活動につながらないのではないだろうか。また、最初に主語を訳し、次に文尾から文頭に帰りながら日本語にするという手順をとるため、文の要点を捉えることに注意が向かない、あるいは、読解に時間がかかりすぎるという問題が起こっていないだろうか。

本研究では、生徒が文の概要を捉えながら、相当量の文を素早く読むための方策としてチャンク・リーディングを取り上げ、どのようにチャンキングを理解し、どのようなトレーニングをつんでいけばそうした読解力をつけることができるかについて研究することとした。

2 研究仮説

英文を読解するために必要な力とは、第一に語彙力であるが、同時に構文や文法の知識、運用力も欠かせない。そして、実際に文を読みすすめる際には、“意味のかたまり（チャンク）”を捉え、文頭からチャンクごとに内容を捉えていく読み方（順送り理解）をすることが重要であると考え、次の仮説をたてた。

仮説 1 チャンク単位に区切ることができるようになれば、情報や書き手のメッセージを読み取る力の向上につながるであろう。

仮説 2 あらかじめチャンクに区切った英文を読めば、チャンク単位の情報を捉えやすくなり、速読力が向上するであろう。

3 研究方法

（１）事前調査

ア 文献研究

（ア）チャンク・リーディングの有効性について

（イ）チャンク・リーディングの指導方法について

（ウ）検証方法について

イ 生徒の現状についての調査

（ア）チャンク・リーディング指導前の読解方法について

（イ）指導に用いるのに適切な英文の難易度について（実用英語検定過去問題）

（２）授業実践

ア 英文をチャンクに区切る指導

イ チャンクに区切った英文を読んで、書かれている情報や書き手のメッセージを的確に読み取る指導

ウ チャンクに区切った英文を、英語の語順のままで意味を捉え、読む速度を上げる指導

(3) 検証方法

ア 英文を規則性に従ってチャンクに区切ることができるかを調べるために、どの程度基本形に則ってチャンクを捉えているかを調査する。

イ 読んだ内容の理解度をQ & Aで確認し、読み取りの正確さを調べる。

ウ 英語検定の過去問題を用いて、チャンクに区切った英文を読んだ場合と、区切らない英文を読んだ場合で、理解の正確さ及び速さ(w.p.m.)を調べる。

4 研究内容

(1) 仮説1に対して、どうすればチャンクに区切る力をつけることができるようになるかを研究する。

ア チャンクを情報の単位として区切る方法を指導するために、「名詞チャンク」「動詞チャンク」「副詞チャンク」の3つの基本形を用いる(田中茂範・佐藤芳明・河原清志共著『もっと自由に英語が使えるチャンク英文法』2003)。

(ア) 名詞チャンク：主語、補語、目的語、または副詞句や副詞節の一部

a 名詞チャンクの基本形(情報の並べ方)

(a)	「限定詞 + (数詞) + (形容詞) + 核名詞 + (後置修飾)」
(b)	基本形「限定詞 + 核名詞」
(c)	to-不定詞・動名詞・that 節・wh-節

(イ) 動詞チャンク：述語の中心をなす「動詞 + 」のかたち

a 動詞の図式「V + (影響範囲・相手)」

b 5つのパターンに習熟する。

(a)	V + (必要情報なし)	例 He is <i>jogging</i> .
(b)	V + 前置詞 + A (名詞)	例 She <i>talked to me</i> .
(c)	V + A (名詞・形容詞・副詞)	例 I <i>love her</i> . / I <i>am fine</i> . / I <i>am home</i> .
(d)	V + A (名詞) + 前置詞 + B (名詞)	例 We <i>informed him of the accident</i> .
(e)	V + A + B (名詞・形容詞)	例 I <i>sent him a letter</i> . / I'll <i>make you happy</i> .

(ウ) 副詞チャンク：表現の幅を広げる意味のかたまり

a	単独の副詞(主に単語で語句の程度・強度を調整する)
b	前置詞 + 名詞チャンク(他の語句にかかるだけでなく、それ自体が情報を提示する)
c	接続詞 + S + の副詞節(名詞チャンク、動詞チャンクが含まれる)

イ チャンクごとに意味を捉えた後、それぞれが基本形に則った単語の配置であることを確認

しながらチャンキングを理解していくように指導する。

(2) 仮説2に対して、チャンキングを活用した読解力の向上を図る指導方法を研究する。

ア チャンクに区切った教科書本文を読み、Q & Aで内容の理解度を確認する。

イ 3年生は英語検定2級、1年生は英語検定準2級の過去問題を用いて、チャンクに区切った英文と、区切らない英文を読んだ後、Q & Aで内容の理解度を確認する。

ウ チャンクに区切った英文を数多く読むことで、文頭から英文を読む習慣を身につける。

エ 英文を読む速度を向上させる。

5 研究計画

(1) 対象生徒・指導科目

年度	対象生徒	科目	単位数	使用教科書
平成19年度	1学年1クラス	英語	3	Prominence English (東京書籍)
平成20年度	1学年2クラス	英語	3	Prominence English (東京書籍)
	3学年1クラス	リーディング	3	Planet Blue Reading Navigator (旺文社)

(2) 指導計画

平成19年6月～10月	ア 先行研究・文献研究調査 (ア) チャンク・リーディングの有効性について (イ) チャンク・リーディングの指導方法について (ウ) 検証方法について (エ) 指導に用いるのに適切な英文の難易度について
平成19年11月～ 平成20年1月 (試行実施)	ア 生徒の現状についての調査 (ア) 読解ストラテジーの実態調査 (イ) チャンク分析力の把握(検証方法ア) イ 授業実践：チャンクの規則性の指導 (ア) 名詞・動詞・副詞チャンク (イ) スラッシュ・リーディングとの違い
平成20年2月～3月 (試行実施)	ア 授業実践：チャンクに区切る指導 (ア) 週末課題によるトレーニング (イ) 情報やメッセージの把握(検証方法イ) イ 指導後の生徒の状況についての調査 (ア) チャンク把握度の調査 (イ) 読解ストラテジーの変化

平成20年4月～11月 (本実施)	<p>ア 授業実践</p> <p>(ア) 名詞・動詞・副詞チャンクの規則性の理解</p> <p>(イ) 情報やメッセージの把握(検証方法イ)</p> <p>(ウ) 読む速度の向上(検証方法ウ)</p> <p>イ 検証</p> <p>(ア) 読んだ内容の理解度をQ & Aで確認し、読み取りの正確さを調べる。</p> <p>(イ) チャンクに区切った英文を読んで、速さ(w.p.m.)を調べる。</p>
----------------------	--

6 研究実践

(1) 文献研究の成果

英文を読解する際に、ひとつの文を全体として捉えるのではなく、チャンクを情報の単位としてクローズアップすると、情報を的確に捉えることができるようになるだけでなく、英語の意味編成のプロセスを明らかにすることができる。

この利点を生かして読むことが読解力の向上につながるものと考え、チャンク・リーディングをするために、生徒が自分で英文をチャンクに区切る力をつける指導に取り組んだ。

(2) 事前調査1(平成20年1月)

ア 目的：主語及び動詞や前置詞の目的語として重要な情報である名詞チャンクを見分け、英文の内容を理解する力を調査する。

イ 問題：英語検定3級の過去問題(大問1題)

ウ 対象：1学年 1クラス(38名)

エ 手順：指導前に、チャンク分け(10分)+設問解答(5分)で行った。

オ 結果：表1

	80%～	70%～	60%～	50%～	40%～	30%～	～20%
人数	0	1	15	13	4	3	2

38名中29名は半分以上の名詞チャンクの基本形を捉えており、全体の把握率(基本形に則って名詞チャンクを捉えている割合)の平均は53.2%であった。

表2

	5問	4問	3問	2問	1問	平均
人数	14	13	7	3	1	79%

質問に対する正解率は38名中27名が概ね80%以上であり、全体の平均も79%であった。読解において、チャンクごとに意味を捉えることが有効な手段となりうることを示していると思われる。

(3) 事前調査2(平成20年1月)

ア 目的：事前調査1と同じ

イ 問題：英語検定準2級の過去問題(大問1題)

ウ 対象：1 学年 1 クラス（38 名）

エ 手順：指導前に，チャンク分け（15 分）＋設問解答（5 分）で行った。

オ 結果：表 3

	60%～	50%～	40%～	30%～	20%～	～10%
人数	0	1	4	10	8	15

基本形に則った名詞チャンクが半分程度把握できた生徒は38 名中1 名で，86.8%の生徒が4 割程度の把握率にとどまり，全体の平均も25.7%であった。

表 4

	5 問	4 問	3 問	2 問	1 問	0 問	平均
人数	0	2	10	13	7	6	37.4%

質問に対する正解率は，3 級の場合と比較すると大変低く，全体の平均が40%以下であった。使用した英文の難易度が，生徒の実態に合っていなかった。

カ 考察

3 級の問題では，名詞チャンクの基本形を半数以上が捉えており，内容理解も約80%ができていのにに対して，準2 級の問題では，名詞チャンクの基本形，内容理解ともに的確に捉えられているとは言えなかった。

これは，準2 級の英文が，語彙レベルや文構造の複雑さ（倒置や関係詞等による後置修飾など）の点で生徒の英語力に合わないものだったことにより，名詞や動詞の区別ができず，チャンクの基本形を捉えられなかったものと考察される。

更にトレーニングを積んでいくことによって，チャンク・リーディングの定着を図っていく必要があると判断した。

（4）週末課題（平成20 年2 月）

ア 目的：名詞チャンクの基本形に限定し，動詞の前後や前置詞の後ろに位置する名詞チャンクを捉える。

イ 問題：英語検定3 級の過去問題（大問1 題）

ウ 対象：1 学年 1 クラス（38 名）

エ 結果：表 5

	80%～	70%～	60%～	50%～	40%～	30%～	～20%
人数	5	2	3	9	7	6	6

チャンク指導を5 時間ほど行った時点での週末課題の結果である。事前調査1 の結果と比較すると，全体の把握率の平均は49.5%と低下している。

表 6

	80%～	70%～	60%～	50%～	40%～	30%～	～20%
人数	3	3	3	5	8	8	8

チャンク指導を9 時間ほど行った時点での週末課題の結果である。全体の把握率の平均は44.6%と更に低下している。

オ 考察

（ア）週末課題として名詞チャンクに区切るトレーニングを行ったが，効果が現れていない。

3 級の問題は生徒にとって理解しやすい内容であり，主語，目的語，補語としての名詞チ

チャンクを基本形に照らし合わせて捉えることは容易であると考えていたが、結果を分析したところ品詞や文構造が把握できない生徒が多いことが分かった。読解力向上において、チャンクを把握することは成績上位者には有効であるが、英語を得意としない生徒にはハードルが高いことがわかり、指導方法の再検討を余儀なくされることとなった。

- (イ) 再検討においては、生徒がチャンク・リーディングの効果を実感すれば、チャンク学習に積極的になることができるであろうと考え、あらかじめ3種類のチャンクに区切った文をいくつか読むことによって、トレーニングを重ねる方法を取り入れた。情報の単位として捉えやすい語数(3～7語を目安)で英文を区切って、実践に取りかかった。

(5) 教科書を用いた実践

ア 教科書を用いた実践1(平成20年4月～6月)

対 象 1学年 普通科 82名

使用教科書 Prominence English (東京書籍) Lesson 2 You Can Change the World!

(ア) 使用テキストの例

In my life, I have **dreamed of** seeing a lot of wild animals, **jungles** and **rainforests** full of birds, but now I **wonder**: will they even **exist** for my children to see?

(イ) 提示方法

In my life,
I have **dreamed of** seeing a lot of wild animals,
jungles and **rainforests** full of birds,
but now I **wonder**:
will they even **exist**
for my children to see?

(ウ) 留意点

- チャンク単位で意味をとりながら英文を読み進めていくことに集中できるように、チャンクを縦に配置した形(縦読みリーディング用)で提示した。
- 和訳するのではなく、チャンク単位で大まかな内容を捉えることに重点を置くように指導した。

(エ) 手順

- Pre-work: 語句の予習(使用したハンドアウトの一部)

意味及び品詞の確認。品詞は()内に記入。

1. jungle () 2. rainforest ()

- While-reading

- (a) 黙読の後、教師がチャンクごとに音読し、生徒は内容を確認しながら聞いた。
- (b) 2度読んだ後で、Q & Aで概要を捉えているかを確認した。

Question 例(教材付属資料から)

- (1) What has Severn Suzuki dreamed of doing?
 - a. Living in jungles or rainforests full of animals and birds.
 - b. Disappearing wild animals, jungles and rainforests full of birds.

c. Seeing a lot of wild animals, jungles and rainforests full of birds.

c Post-reading

(a) 付属CDを使用し、耳から内容を確認するためにリスニング活動を行った。

(b) 教科書付属資料を使用して、要約文の作成に取り組んだ。

例 【Summary】：()内に適語を入れ、内容が一致するように解答しなさい。

One of her dreams is to see a lot of wild (), jungles and () full of birds, but she wonders if she can.

イ 教科書を用いた実践2 (平成20年7月～11月)

対象 3学年 普通科 41名

使用教科書 Planet Blue Reading Navigator Revised Edition (旺文社) Lesson 7 The Memento

(ア) 提示方法

A spaceship from the planet Flor
happened to touch down on Earth
in the course of its travels.
However,
the Florians did not succeed
in meeting any human—
humans were not yet around.

(イ) 留意点

- 英文の意味を瞬時に理解することを目的として、Bird's-eye view 式リーディング (名和 2005) を取り入れ、英文にざっと目を通して概要や要点を把握することを生徒により印象づけた。
- 鳥が空中から獲物を探す時の気持ちになって、姿勢を正し、目を文字から30cmほど離して行うように指導した。
- 意味を捉える単位は、単語ではなく、関連した語句のかたまり (チャンク) であることを踏まえて読みすすめるように指導した。
- 黙読、音読の順で、スピードをつけて実施した。
- チャンクを日本語に訳すのではなく、情報や書き手のメッセージを全体的に読み取るように指導した。
- より正確に情報を把握できるようにするため、ひとつのチャンク内の語数を徐々に増やしてトレーニングを重ねた。

(ウ) 手順

- Pre-work : 語句の予習 (使用したハンドアウトの一部)

Vocabulary : 新出単語の意味を英語で表しています。該当する語を探しなさい。

ア[] : a small thing that you keep to remind you of someone or something

イ[] : a vehicle for carrying people through space

- While-reading

Bird's-eye view 式リーディング用にチャンクに区切った本文を読み、True or False Quizzesによって概要を捉えることができたかを確認した。

- Post-reading : 音読

(a) 内容語は“強く、はっきり、長めに発音する”，機能語は“弱く、低く、速く発音する”ように指導した。

(b) 名和(2005)によると，1つの息の段落(breath group)の中には，最も強く発音される語が1語含まれる。その語は，該当の語群の中で最も重要な意味を担っているのが原則である，という点に注目して行った。

(c) チャンク全体を一目でとらえ，スピードをつけて読むように指導した。

(d) 黙読 音読 Read and look-up の順で，数回ずつ読んだ。

(6) 英語検定の問題を用いた実践(平成20年7月～11月)

ア 教材

1年生には英語検定準2級過去問題，3年生には英語検定2級過去問題を利用した。

イ 手順

(ア) 授業の冒頭の10分間で行う。

(イ) チャンクに区切った英文と区切らない英文を読む。

(ウ) それぞれ速読力(w.p.m.)を測定後，質問に解答し，内容理解の的確さを調べる。

ウ チャンクごとの読み方の留意点

(ア) 目を左から右へと移動させ，逆行しないで意味をとる。

(イ) 黙読で行なう。

(ウ) チャンクの意味は一語一語にこだわらず，全体としてまとめて理解するように努める。

(エ) チャンクの意味を理解した上で，その内容を頭に描きながら，何度も音読しながらトレーニングする。

(オ) 慣れるにしたがって読むスピードを上げる。

7 研究評価

(1) 生徒は自らチャンクに区切ることができるようになったか

平成20年1月～2月の授業実践では，自らの力でチャンクに区切ることを目標にした。特に，動詞の前後に位置する名詞チャンクを捉えることが，主語や目的語をつかむ有効な方法だと考えた。しかし，週末課題の結果に現れているように，2ヶ月間の指導でも1年生にとっては名詞チャンクの基本形に区切ることさえ難しかった。例えば，名詞チャンクを主語として捉える際に動詞を含んでしまう，述語動詞の後に続くto-不定詞や動名詞を目的語や補語として捉えられない，関係詞で始まる節やto-不定詞・分詞が後置修飾の働きをしていることに気がつかないなどが多く見られた。チャンクに区切るためには，品詞を判断する語彙力や文構造を捉えるための文法の知識，運用力が必要であり，文法指導に偏らないように配慮しながらこれらの指導も十分に行わなければならないことを痛感した。

結論として，チャンクに区切ることは，そのための語彙や文法理解の指導が先行しない限り，有効に機能しないと言わざるを得ない。

(2) チャンク・リーディングで読解力や速読力が向上したか

ア 1年生で行った実践

(ア) 1年生(80名)に英語検定3級過去問題を用いて行った実践

表1 速読力(w.p.m.)及び正解率の比較

	w.p.m.(平均)	正解率(平均)
A チャンクに区切った英文	119.0	60%
B チャンクに区切らない英文	101.7	72%

異なる英文を用いて実践したが、正解率においてはチャンクに区切らない英文に好結果が現れた。この段階では、意味の単位としてのチャンクについての理解が不十分であり、読解の方法に戸惑いがあったのではないかと考える。すなわち、従前の読解方法で内容を捉えることに慣れていたことが要因ではないかと考える。

速読力(w.p.m.)については、チャンクに区切った英文を用いた方が高い数値を示している。

(イ) 1年生(82名)に英語検定準2級過去問題を用いて行った実践

表2 速読力(w.p.m.)及び正解率の比較

	w.p.m.(平均)	正解率(平均)
A チャンクに区切った英文 a	68.7	23.8%
b	71.2	58.8%
c	67.7	58.0%
d	73.3	45.0%
e	79.3	44.0%
A 平均	72.0	45.9%
B チャンクに区切らない英文 f	75.2	42.5%
g	61.3	43.8%
h	68.0	53.8%
i	73.1	57.5%
j	74.1	52.5%
B 平均	70.3	50.0%

(ウ) 考察

a 速読力(w.p.m.)に関して

英語検定準2級レベルの英文を読んだ場合でも、3級の場合と同様に、チャンクに区切った英文を読んだ時の数値が高い。チャンクによって構文を気にせずに読みすすめるという点が有利に働いたものと考ええる。

b 正解率に関して

通常の英文を読んだ時の方が高い。特に問題文a(“Noisy Hospital”2005年第3回筆記)の正解率の低さが目立っているが、これは、初めて教科書以外から題材をとったこと、チャンク・リーディングが十分理解できず、慣れていなかったことなどが原因であったと考

える。したがって、この時点ではトレーニングを重ねるにつれて読解力は向上するであろうと予測していたが、その後の w.p.m. 及び正解率の数値も芳しくない。チャンク・リーディングの有効性を立証するには至らなかったと言わざるを得ない。

c 英文の難易度の設定

英語検定準 2 級の問題が生徒の実態に合わず、知らない単語が多いことや未知語の意味を推測しながら読まなければならないことが読解の障害になり、検証方法として適切ではなかったものと思われる。

イ 3 年生で行った実践

(ア) 3 年生に英語検定準 2 級過去問題を用いて行った実践

表 3 速読力 (w.p.m.) 及び正解数の比較

	w.p.m. (平均)	正解率 (平均)
A チャンクに区切った英文 a	89.9	42.5%
b	92.6	47.5%
c	93.3	52.5%
d	88.5	52.0%
A 平均	91.1	48.6%
B チャンクに区切らない英文 e	86.8	30.0%
f	85.0	42.5%
g	94.2	58.0%
h	93.8	52.0%
B 平均	90.0	45.6%

(イ) 考察

a 速読力 (w.p.m.) に関して

w.p.m. は、1 年生の場合と同様に、チャンクに区切った英文を読んだ時の数値が高い。しかし 3 年生ということを考えれば、w.p.m. 100 語レベルをクリアできなかったことは速読力が向上したとするには物足りない。

b 正解率に関して

平均正解率もチャンクに区切った英文を読んだ時の方が高い数値を示したものの、速読力と同様に、3 年生としては 60% を超える正解率が期待され、英文の難易度の設定が検証に適していなかったものと推察する。

(3) チャンク・リーディングに関する意識調査を通しての考察

英語検定の過去問題を用いた実践では、事前に期待していた程の効果を検証できていないが、チャンク・リーディングの学習を通して読解方法がどのように変容したか、意識調査によって探った。

ア 読解に関して

読解においてチャンク・リーディングが役に立つと感じている生徒は、1 年生、3 年生と

もに 97%を超えている。その長所として、文構造が捉えやすく、主語や動詞などの文の骨格をつかみながら読みすすめることができること、文単位で読む場合と比べて読みやすく、意味が取りやすいことなどを挙げている生徒が多い(95%)。また、英文に対する抵抗感がなくなってきた(23.1%)、チャンクごとに語順どおりに読むことで、後ろから訳すことがなくなった(21.3%)、というコメントもあり、生徒がチャンク・リーディングを概ね肯定的に捉えていることが分かる。

イ 速読に関して

チャンクに区切った英文が読みやすいと回答した生徒は、1年生、3年生ともに75%を超えている。主な理由には、英語の語順に従って読みすすめることができるので速く読めるようになった(40%)、英語の思考の流れに沿って内容を捉えるようになった(17.5%)などがあった。

速読についても、障害になる未知語が少ない英文からトレーニングを始めることが重要であり、十分習熟したと思われる段階で、より難易度の高い英文に取り組むことによって、速読力が向上するものと考察する。

ウ 3年生で導入した2つの英文の提示方法について

3年生のリーディングの授業で導入した縦読みリーディング用と Bird's-eye view 式リーディング用の2つの提示方法ではどちらが読みやすいかを生徒に尋ねたところ、縦読みリーディング用を52.5%、Bird's-eye view 式リーディング用を35.0%の生徒が支持した。生徒にとっては、文頭が揃っているほうが読みやすいということが分かった。

エ チャンク・リーディングで的確に情報を読み取れない原因について

英語検定の問題による実践で、英文の内容を的確に捉えることのできない原因を、生徒は語彙力不足(1年生98.8%、3年生92.5%)、文法力不足(1年生82.7%、3年生75.0%)としている。

8 結論

(1) 仮説1

本研究における英語検定の問題を用いた実践では、チャンク・リーディングが読解に有効な手段であることを数値で証明することはできなかった。その反面、読解方法を変えることで内容が捉えやすくなる、英文に対する抵抗感が少なくなるというコメントが見られたことから、「文法訳読」とは明らかに違う読解方法としてのチャンク・リーディングを生徒に印象づけた。さらにトレーニングを重ねることによって、英語の語順に従って内容を捉える読解力が身についていくことを実感させることができた。そして、英語学習における語彙力、文法力の重要性を認識することによって、学習方法を改善して積極的に英語習得に努めようとするモチベーションを高める効果があった。

(2) 仮説2

読解の速度については、表1～3の通り、チャンクに区切った英文を読んだ時の方が僅かながら高い数値となっており、読みやすさにおけるチャンク・リーディングの優位性を示すことができた。チャンクを意識して読解をすすめることが主語や目的語を明確にすること、文構造や文型を捉えることを促し、長文に対する心理的抵抗感が軽減することを体験できた

ことは生徒にとって大きな収穫である。さらに、未知語の意味を前後関係から推測しながら読むことの重要性を認識したことによって、今後の学習活動がより自立的なものになることが期待できる。

(3) まとめ

本研究のテーマであるチャンク・リーディングを通して、書かれている情報や書き手のメッセージを的確に読み取る読解方法は、生徒の英文理解に変化をもたらせた。その習熟を通して、定着を確実なものにしなければならないという課題は残るものの、日本語の影響を受け、後ろから前に戻って訳すという方法から、英文の内容を、英語の語順で捉える読解へと変化させた。今後も、リーディングの妨げとなる和訳をすることなく、意味のかたまりの単位としてのチャンクを活用して直読直解する指導を実践していく。

参考文献

- 古谷千里・ケネス・サガワ 『英語速読第1歩 辞書なしで読める25のエピソード』 (2004) 創元社
- 名和雄次郎 著 『速読速解 スケルトン式 英文リーディング』 (2005) 桐原書店
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一 著 『英語感覚が身につく実践的指導 コアとチャンクの活用法』 (2006) 大修館書店
- 田中茂範・佐藤芳明・河原清志 共著 『もっと自由に英語が使えるチャンク英文法』 (2003) コスモピア